

☆ 百年余の歴史を持つ跡見学園も、近年少しずつ「近代化」され、数多の「規約」と「委員会」が作られるようになった。かくて、『跡見学園短期大学紀要』は学術委員会が編集の責を負うこととなり、投稿規程も成文化されて二年目となった。

☆ 紀要本誌を跡見学園短期大学に勤務する教員の日頃の研究を発表する場とする一方、まとまった著述の発表のために別冊を刊行することになった。

☆ 昭和九年来、中断はあるものの、跡見学園に出講しておられる志賀富士男氏と私が研究室でお目にかかることになったのは一昨年来であるが、氏から御尊父志賀重昂の書かれた『鈴江日記』刊行の志を持っておられることをうかがった。折から紀要別冊刊行の議も決し、最初の試みとしてこれを公刊する機会を得た。

☆ 志賀富士男氏は自然科学畑の方であられるが、日頃から御尊父の仕事の研究をも含めて、日本の憲政史に多大の興味を寄せておられる。敢えて、解説をお願いした次第である。

☆ 『鈴江日記』を翻刻するために、土井和代、津田奈保子、中山紀代子の諸氏の御協力を得た。記してここに感謝の意を表したい。

跡見学園短期大学学術委員会委員長

吉 馴 明 子

跡見学園短期大学紀要 第16集 別冊

昭和五十五年三月二十六日 印刷
昭和五十五年三月三十一日 発行

編集者 跡見学園短期大学
学術委員会

印刷者 大日本法令印刷株式会社

発行所 112 東京都文京区大塚一―五―二

跡見学園短期大学
電話(九四二)八二六二(代)七七